

一 与論島の位置と環境

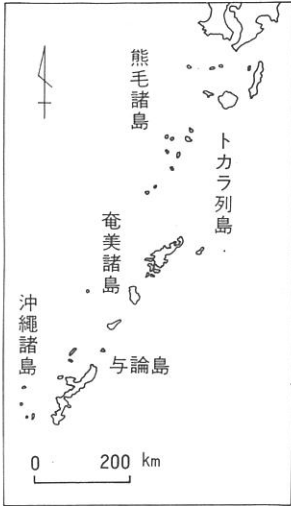
与論島は南西諸島のほぼ中央にあり、奄美諸島の最南端に位置する。鹿児島島の南方583kmにあり、北方32kmに沖永良部島、南方28km海上に沖縄本島をひかえた、周囲23kmの楕円形をした小島である(第1図上)。

この島の基盤は古生層からなり、珊瑚礁におおわれた部分が多い。海岸線は海蝕崖や砂丘が発達し、沖合1kmにわたって堡礁をめぐらしている。至る所にパンダナス(アダン)・ガジュマル・蘇鉄などの亜熱帯性の植物が繁茂し、南方的雰囲気をかもし出している。

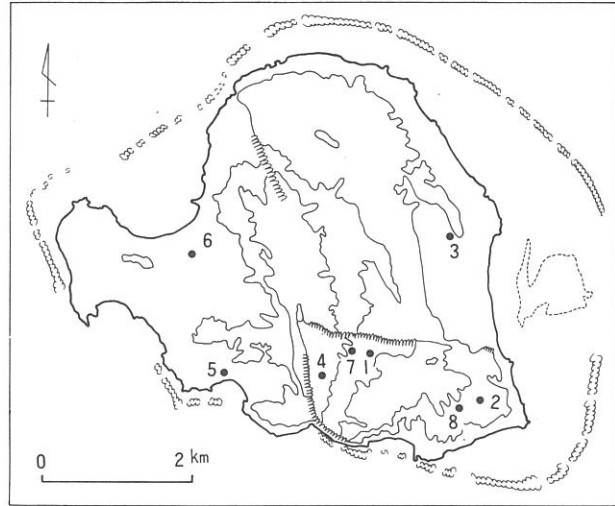
本島の中央付近を、西に落ちる崖線が南北に走っている。その崖線の中ほどやや南寄り、標高80m付近から更に東側へ、北に落ちる崖線が分岐し、全島を3地域に分けている。そのうち朝戸、城(Gusuku) 付近の標高50mから90m程の台地部を除けば、全島20m以下の平坦な島である。雨水は隆起珊瑚礁と基盤の間を伏流するため、地表に川が発達しないが、湧水には恵まれている。土器の散布地等が高所や海浜になく、古生層の岩盤が露出している標高70mのあたりに分布しているのもそのためであろう。

これらのことは、先史時代人の生活にとって、この島の環境が必ずしも不都合なものではなかったことを示している。これまでの報告によれば、朝戸・立長(Ritchyō)^{註1}・麦屋の各地区で先史遺物が発見されており、中・近世の陶磁器についても報告がある。^{註2・3}しかし、島が過小なためか、その量は流石に少なく、遺物散布の祖源地点(遺跡)がどこにあるのか未確定のままであった。

白木原と野口は、調査地点を選定するため、これまでの諸報告と最近の情報をもとに幾つかの候補地点を踏査した(6月初旬)。その結果、遺跡の所在地点を確認するには至らなかったが、朝戸地区岩山新二氏の畑地(メーサフ)と川畑博道氏の畑地(ネツツェ)、麦屋地区菊千代氏経営の与論民具館敷地内(ヤドウンジョウ)の3地点を発掘地点に選定した。朝戸地区の2地点は付近に盛んな湧水があり、過去に石器等が拾得されており、現在も土器の細片が少量ながら散っており、作物等への損害が少なく、地主に御理解があつてしかも設営の便宜も他よりは勝れていたからである。また、民具館の敷地を選んだのは、展示施設の拡充に際してここから土器片が採集され、土



(与論島の位置)



(与論島の遺跡)



(調査地点付近の地勢)

第1図 与論島の遺跡と調査地点付近の地勢

1. 朝戸 (A; メーサフ・B; ネットェ) 遺物散布地 2. 麦屋 (ヤドウンジョウ) 遺物散布地
 3. 古里遺跡 (依・註3書) 4. 城遺跡 (依・註2書) 5. 立長ハギビナ槌石出土地点 (依・註1書)
 6. 茶花遺跡 (依・註3書) 7. 太田氏宅遺物散布地 (依・註1書) 8. 片岡氏宅遺物散布地 (依・註1書)

器片の出土地点が菊氏の御配慮で手厚く保護されており、かつ地形から察して遺跡の中心部から遠くはないと判断されたからである（第1図下）。（山口）

註1. 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義麿・原口正三「奄美大島の先史時代」九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美—自然と文化』（1959）

註2. 有元彰順「与論城遺跡について」『鹿児島考古』第10号（1974）

註3. 河口貞徳「南島先史時代」『鹿児島大学南方産業科学研究所報告』第1巻第2号（1956）

二 発掘調査の概要

I メーサフ・ネツツェ区遺物散布地

1. 位置と環境（第2図 図版I・III）

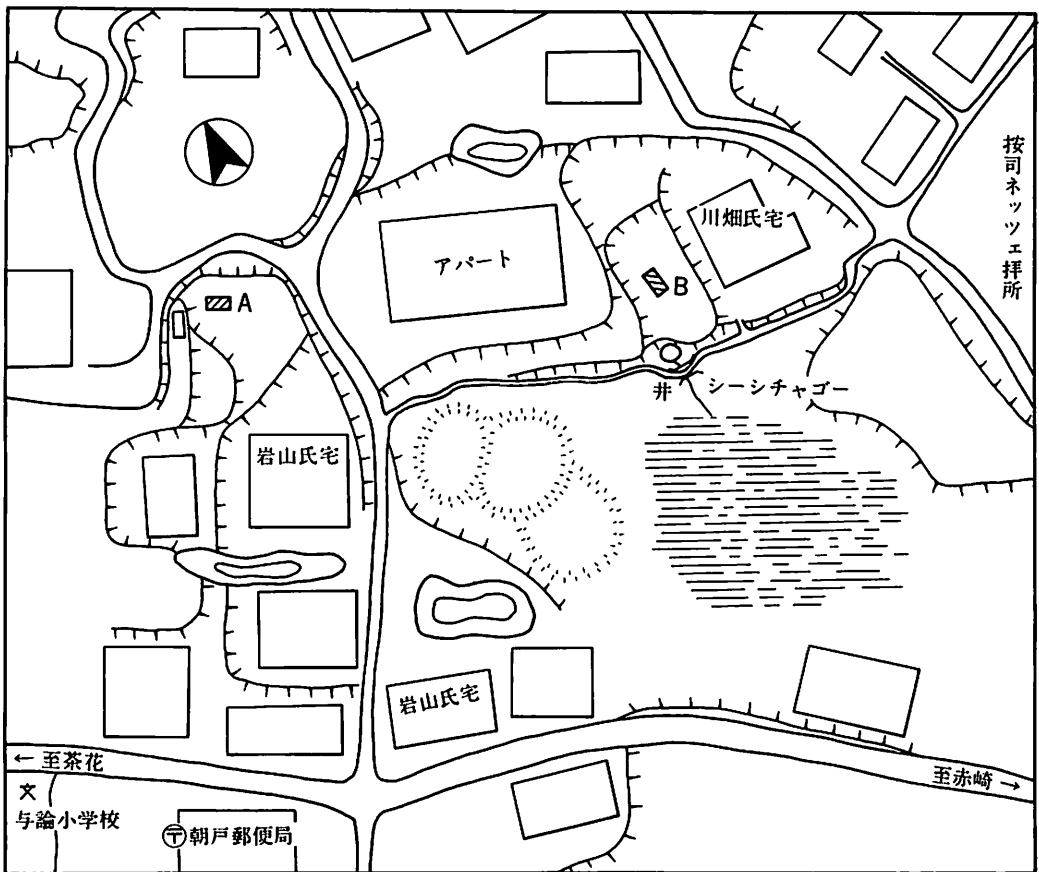
発掘地点は、与論町大字朝戸字尾下川1690番（通称ネツツェ）・与論町朝戸小字花川1620番（通称メーサフ）にある。

発掘地点の属する朝戸部落は島の最高所である城（Gusuku）の東南側にひろがる台地上にある。朝戸部落の東寄りに、南東方面に開口した大きな凹地があり、その底は基盤が露出し湧水が盛んである。中でも凹地の中央北寄りにある木下井（Shishichagō）はその水の清冽と豊かさで島内に有名であり、付近の集落形成の拠りどころとなったと信じられている。^{註1}木下井の水は凹地の中央で径100mに近い湿地となって澁み、芭蕉・ニガイモなどの群落が広がっている。

その凹地の北及び西側の台地や傾斜面から石斧等が拾得されており、耕作によって碎かれた土器の細片が検出される。付近に遺跡が立地することは略確実である。しかしこの島で畑地や屋敷地を造成するには、珊瑚礁の露頭を取り除いて畦畔に積み上げながら土地を均してゆかねばならない。従って集落に近い旧微地形は丹念に改変されており、しかも植物の繁茂が著しい。このため、短期間の地表観察で遺跡の中心付近を確認することは困難であった。よって北側ではほとんど唯一の発掘可能地点である川畑氏宅とアパートの間の傾斜地（ネツツェ遺物散布地）を試掘することにし、土地の通称名を採ってこれをネツツェトレンチ（第2図B）とした。また西側の台地上にも、かつて石斧が採集され、現在も土器片が微量ながら検出される地点（メーサフ遺物散布地）に調査塙を設け、メーサフトレンチ（第2図A）とした。

ネツツェ遺物散布地は標高約67m。雑草の密生する狭隘な傾斜地であるが、比較的最近まで川畑氏の菜園に利用されていた。またメーサフ遺物散布地は標高約72mで、以前岩山氏の屋敷地であったが、岩山氏が南の道路沿いに移転した後は珊瑚礁の露頭等を除去し、畑に使用して現在に及んでいるという。 (古城)

註1. もと部落の中心をなす湧水としてはメーサフの湧水が利用されていた。しかし汲水に逢って難渋することがあったのでメーサフの湧水に使用されていた石材を木下井に移してその言祝を継がしめ、現在に及んでいると云う。なお、メーサフ湧水点付近の住居はおおむね他に移転し、湧水点も埋没して土地の湿りに痕跡をとどめているにすぎない。また木下井への祭祀は、水道の敷設によってその価値が失われた現在も引き続き行われている。



第2図 朝戸地区(メーサフ・ネツツェ遺物散布地)見取図

A ;メーサフトレンチ B ;ネツツェトレンチ

2. メーサフ遺物散布地

(1) 層序 (第3図 図版II上)

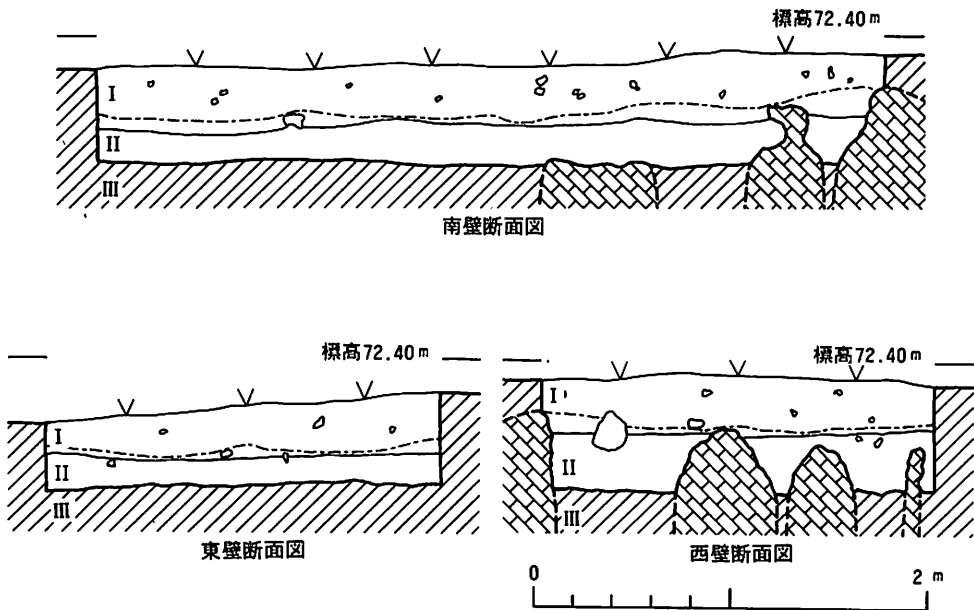
2 m × 4 mの東西方向に長いトレンチによって調査した。

I層 厚さ約10~20cmの黒褐色の土層である。粘性をおび、南側に厚い。土器と陶器の細片が混出する。攪乱土であり、珊瑚の小片を含んでいる。なお破線より上の部分は最近の耕耘部分である。

II層 厚さ5~15cmの赤味をおびた黄褐色の土層である。I層に比べ粘性が強い。西側より流れ込んだ二次堆積層と思われる、珊瑚の小片を含んでいる。一部に隆起珊瑚礁が露出している。

III層 地山であり、その下部は隆起珊瑚礁である。

南西隅近くに、II層上面から楕円形に落ち込んだ凹みと、東壁から西壁に伸びる溝が検出された。落ち込みは短径約20cm、長径約70cm、深さが約50cmである。溝は深さが約10cm、幅10~20cmである。この溝は西壁に伸びる途中で不明確になった。溝の性格および落ち込みとの関係は確認できなかった。(古城)



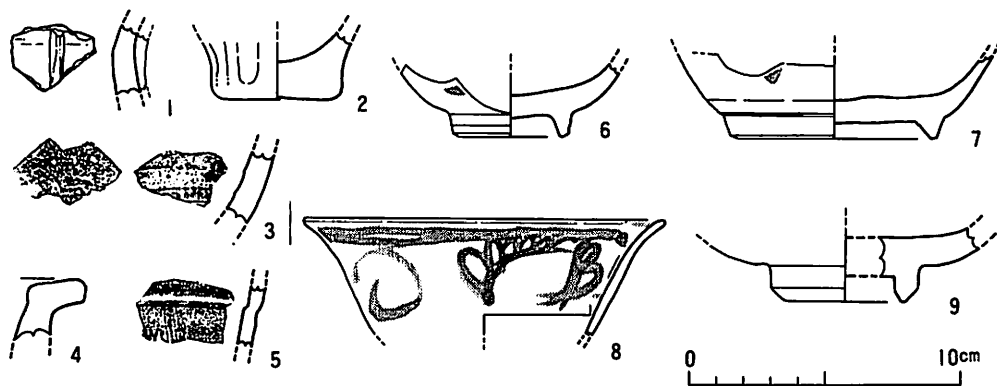
第3図 断面実測図

(2) 出土遺物 (第4図 図版II中)

土器・類須恵器^{註1}・陶磁器が出土した。少量であり、かつほとんどが細片であった。

1は貼付け凸帯をもつ頸部の土器片である。砂粒を少量含み、焼成も比較的良好で赤褐色を呈する。全面ナデによる調整が行なわれている。2はあげ底気味の平底の土器片であるが、色調・胎土ともに1と類似する。3は類須恵器の胴部破片である。わずかに白い粉末状の粒子を含み、器面は青灰色を呈するが、断口は赤褐色である。内器面は粗いロクロ痕のままに放置されている。4は琉球甕の口縁部破片である。無釉で赤褐色を呈する。他に同様の焼きで、薄く釉をかけた胴部の破片も出土している。5は胴部上方で外側に屈曲する播鉢の破片である。器面はやや光沢のある暗茶褐色で薩摩焼き乃至はその影響を受けたものと思われる。6は伊万里焼きの底部である。見込みに重ね焼きの痕がある。8は碗の残欠で、灰味の強い呉須の濃淡により草花文などの文様を描いてある。胎土は灰白色で、青白色の透明釉がかかり、ロクロによる調整痕がみえる。7は8に類似し、見込みと高台・高台内部は露胎のままである。いずれも仙頭窯のものに類似するが断定しがたい。9は青磁の底部片である。釉はややくすんだ緑色で、高台内部は露胎である。断口は灰色であるが、高台と高台内部は淡褐色を呈する。17世紀の龍泉窯のものである。(鳥越)

註1. 仮称である。南西諸島に一般的な青灰色で無釉の硬陶を指す。須恵器に酷似するがまだ確証を得ない。



第4図 土器・陶磁器実測図

1・2・8・9; I層, 3・4・5; II層, 6・7; 表採

3. ネットェ遺物散布地

(1) 層序と遺構 (第5図 図版Ⅳ・Ⅴ)

〈層序〉 トレンチは2×4m、傾斜に沿って南北方向に設定した。狭隘な地点で、しかも土の粘性が強く、掘削は困難であった。南東方向に傾斜する緩斜面上に立地しているため、層は主に北西方向から流入した土の堆積によって形成されている。特に下部層において、その傾向が強い。層序は次のとおりである。

I層 厚さ40cm前後の黒褐色を呈する耕作土である。上部層(Ia層)と下部層(Ib層)に分けられ、前者は後者よりわずかに暗い。ともに樹根が見られ、前者には特に多い。耕作によって粉碎された遺物を含む。

II層 厚さ約20～40cmの黒色土層で、粘性が強い。未攪乱土層である。トレンチ北半を中心に貝・獣骨・礫が散布していた。この層からは近世陶磁器・土器・石器・自然遺物が出土した。土器には細片が多い。

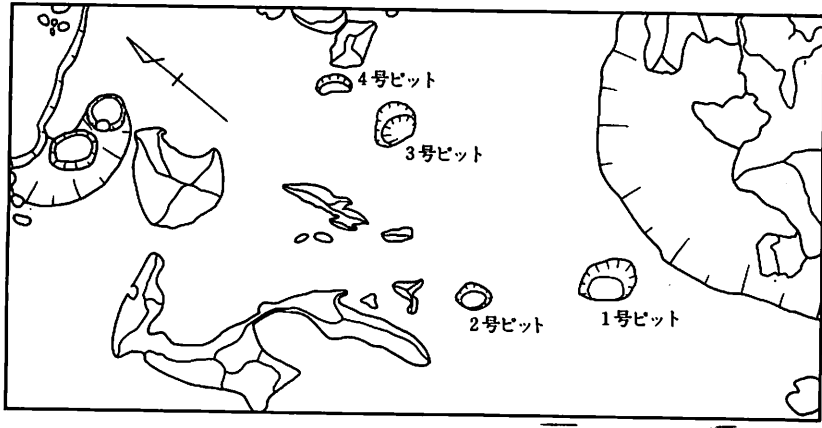
III層 厚さ約20～40cmの黄褐色土層で、かなり粘性が強い。上部層(IIIa層)と下部層(IIIb層)に分けられ、前者は後者よりやや暗い。前者はトレンチ北側に厚く、南壁までは及んでいない。後者は南壁付近で大きく落ち込んでいる。両者ともに土器・類須恵器・宋磁を出土し、近世陶磁器は全く出土しなかった。

IV層 やや赤味を帯びた黄褐色を呈する土層で、粘性が強い。トレンチ南壁までは及んでいない。この層はごくわずかな色の違いで4つに細分できる。一部ではレンズ状に堆積するなど、数度にわたる流入の状況を示している。出土遺物は後述のI類土器・類須恵器のみである。

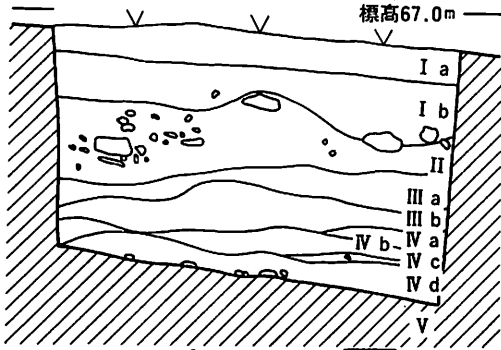
V層 無遺物層である。いわゆる地山で、赤褐色を呈する。

〈遺構〉 IVd層上面より、トレンチ北東隅で落ち込みが検出された。落ち込みは浅くて広く、落ち込み内では土器・類須恵器・小礫などが見られた。

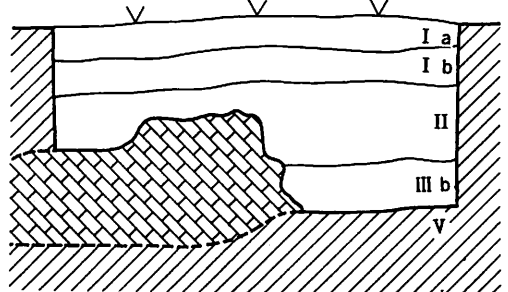
V層直上より、ピットが4ヶ検出され、南側より1号～4号とした。1号・2号はともに深さ20cm前後で、プランは不整な楕円形を呈し、1号では底部を含む土器片・類須恵器を出土した。3号・4号はともにその径に比して深さが異常に深く、しかもその落ち込み方向は斜めで、ともに人為的な遺構とは思われなかった。 (米倉)



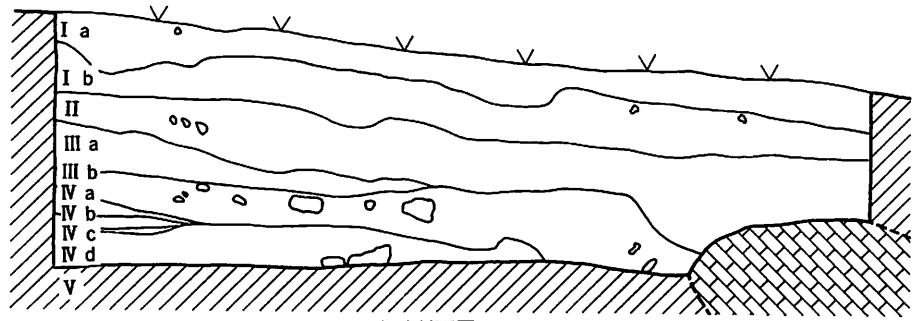
標高67.0m



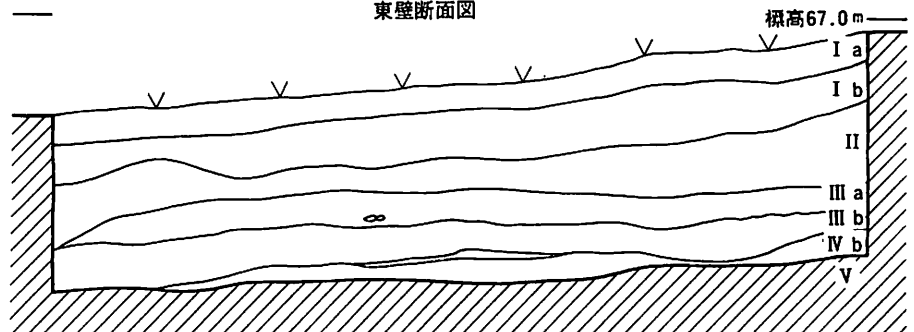
北壁断面図



南壁断面図 標高67.0m



東壁断面図



西壁断面図



第5図 平面・断面実測図

(2) 出土遺物

〈土器〉 (第6図 図版VI上)

出土土器は2類に大別でき、その多くは細片で、器形を復元できるものはない。

I類(1~11) 器厚5mm前後の薄手の土器である。口縁部は外反するもの(1~3)と直立するもの(4)があり、底部は平底である。貼り付け凸帯を持つもの(1・5)以外は無文で、外器面はハケ目状の調整・ナデ調整を、内器面は横方向のナデで調整してある。胎土には細砂粒を含み、滑石を含むもの(2・4・11)や貝殻粒に似た白色の粒子を含むものもある。全体として赤褐色を呈するが、黒色を呈するもの(4)もある。全体の特徴より、I類土器はフェンサ下層式に比定できる。

II類(12~18) 器厚1cm前後の厚手の無文土器である。口縁部はやや外反するもの(13)や開きながら直立するもの(12・14)内弯するもの(15・16)等変化に富む。底部は平底と思われる。外器面には横方向のナデ・鋭削りや圧痕・叩痕を伴う調整を、内器面には、横方向のナデ調整を施す。胎土は粗く、1mmほどの砂粒や上記の白色粒を多く含む。焼成は比較的良い。色調は全体として赤褐色を呈するが、各片に若干の差がある。これらの特徴よりII類土器はフェンサ上層式に比定できる。(米倉)

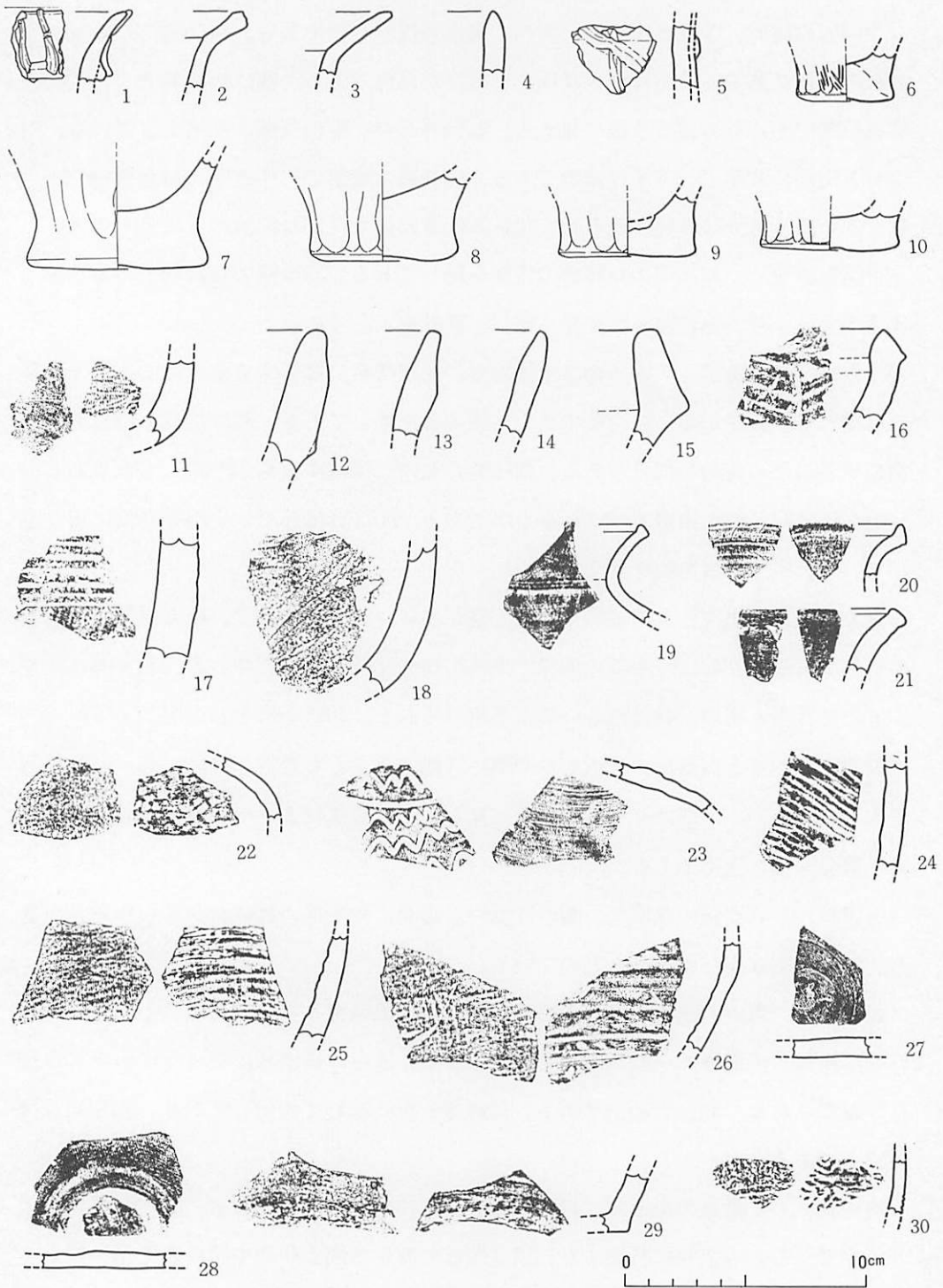
〈類須恵器〉 (第6図 図版VI上)

III・IV層を中心として、類須恵器片が30数点出土した。

すべてが胎土中に白い粉末状の粒子を含んでいる。器形は平底の壺形で、口縁部が強く外反するもの(19)、底部内面にロクロ痕のあるもの(27・28)、肩が強く張るもの(22)が出土している。また、23の外器面には一本描きの1条の沈線と4条の波文がみられる。25・26の成形法は粘土を巻き上げた後に叩き締めを行ない、ロクロで調整したものと思われる。外器面に比べて内器面の調整は粗い。22の内器面には霞文状の叩き痕が顕著であるが、ロクロ痕もみられる。24の外器面には蓆文状の叩き締めの痕が見られ、内器面には指頭痕類似の圧痕がある。色調は器面が青灰色で、断口が暗赤褐色のものが多いが、灰白色のもの(24)、赤褐色のもの(30)、黒褐色のもの(26)もある。(鳥越)

〈陶磁器〉 (第7図 図版VI下)

陶磁器はIII層より白磁が、I・II層より白磁・青磁・九州本土産の近世陶磁器・琉球産陶器等が出土した。



第6図 土器・類須恵器実測図

1・12・13・16・17；II層， 2～4・7・14・18・19・22・24・27・28；III a層， 5・6・8・10・11・21・23・25・26・30；III b層， 9・20・29；IV層， 15；表採

〈中国製白磁〉 3点の出土で、すべて南宋時代のものである。31は碗の口縁部で玉縁状に設けてある。胎土は僅かに灰色を帯びた白色である。釉は比較的薄く施され、貫乳が密であるため他より寂て見える。類似のものが宇宿貝塚より出土している。34は31と同種の底部で、下半は露胎である。35は碗の底部で、不透明の白色釉を施し、畳付きを除く部分に施釉されるが、見込みは重ね焼きにより露胎のところもある。

〈中国製青磁〉 32は碗の口縁部で雷文を施してある。33は盤の口縁部である。胎土は淡褐色で、濃青色の釉をやや厚く施し、貫乳を入れてある。

〈南方系〉 東南アジアあるいは中国南部の仙頭窯産に類似するものである。36は鉢の口縁部で、黄味がかかった白色の胎土に透明釉を施してある。37はこれと同類の鉢で、重ね焼きのため露胎の部分もある。仙頭窯のものに類似するものが他にも数点ある。

〈南蛮陶器〉 俗に南蛮と呼ばれるものである。50は口縁部で、先端を外側に折り返している。胎土に白色粒を多く含む。

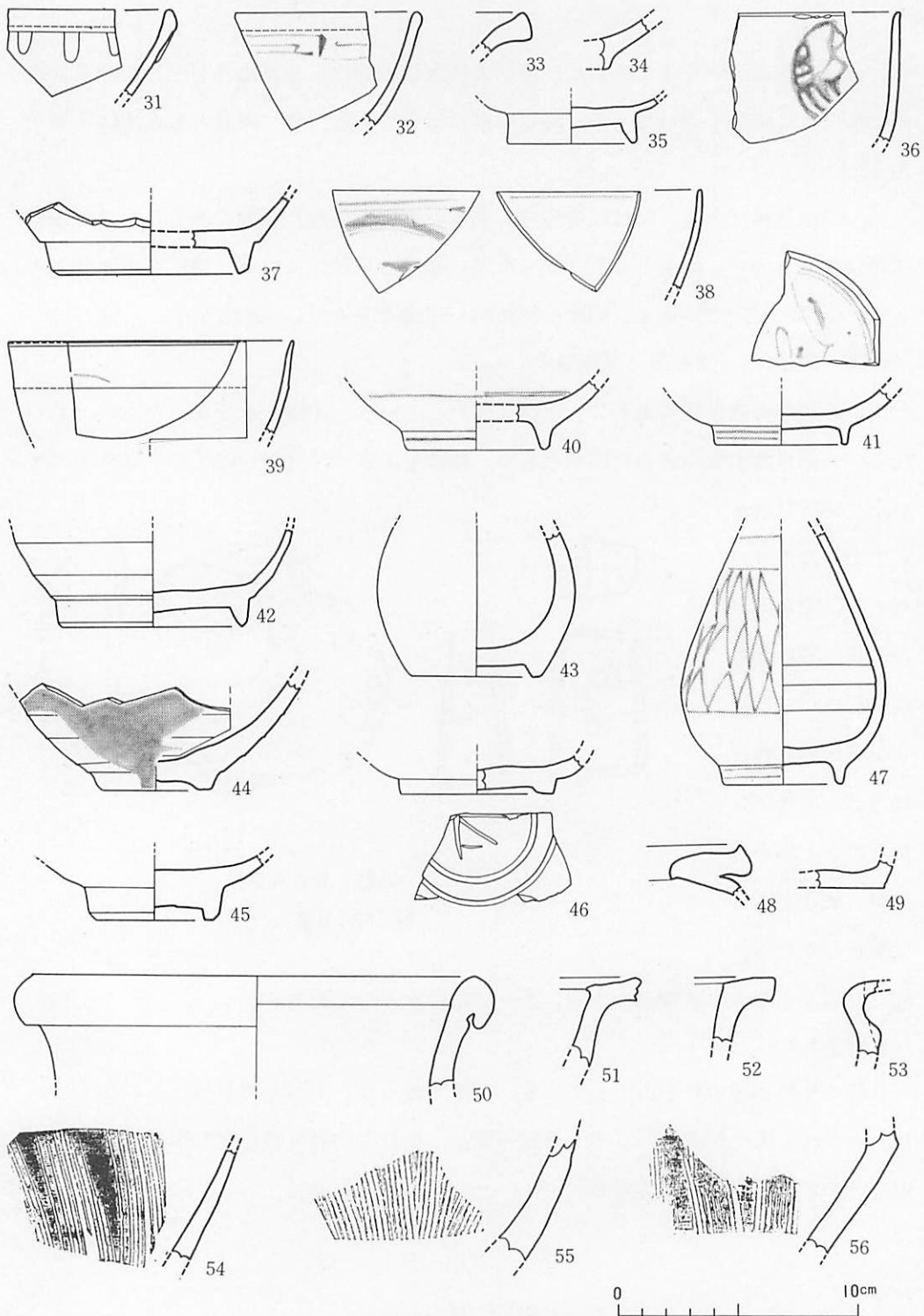
〈伊万里焼〉 出土した陶磁器では最も量が多い。38～41は碗で、伊万里特有の白色の胎土であるが、40はやや灰色気味で黒色の細かな粒子を含んでいる。38・39はややくすんだ呉須を用い、41は明るい呉須を用いてある。40は全体として光沢が弱いのが、外器面に比べると内器面の光沢がやや強い。他は3点とも光沢が強い。43・47は徳利である。43はごく一部にやや濃い呉須が見られる。47は43よりやや薄い呉須で、鋸歯文と圏線を描き込んである。

〈唐津焼〉 45は碗の底部で、高台は低い。両面にやや暗い黄味がかかった灰色釉を施し、外底に削り出しの痕をとどめている。

〈薩摩焼〉 数点の出土で、その特徴が薩摩焼に類似するものである。46は底部で、外底に篋書きの記号の一部が残っている。断口には白い縞模様になった溶解中の混和材が観察される。48は口縁部である。口縁端を折り返して成形しており、推定口径は約33cmである。

〈琉球甕〉 十数点の出土で、49以外は赤褐色の無釉のものである。51・52は口縁部の破片で「く」の字状に外反する。53は頸部の破片で他よりやや暗い色を呈している。49は底部で外器面には黒褐色の釉を施してある。

42・44は鉢の底部である。42は内外器面ともに灰色に濁った半透明の釉を施してあ



第7图 陶磁器实测图

31 ; III a 層, 32 · 35 · 40 · 43 ~ 49 · 54 · 56 ; II 層, 33 ; III b 層, 34 · 36 ~ 39 · 41 ~ 42 · 55 ; I b 層, 50 · 53 ; 表採, 51 ~ 52 ; I a 層

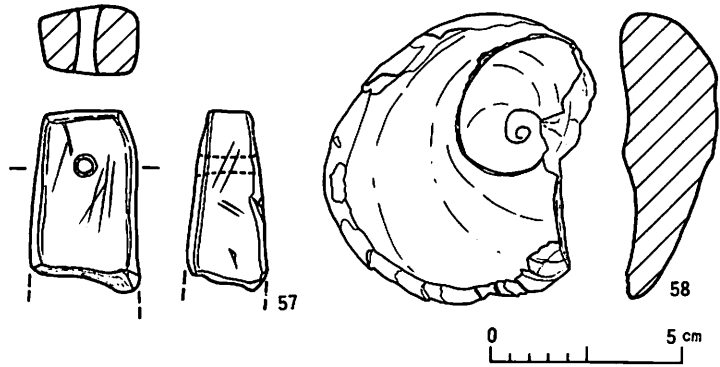
る。44は黒色に近い胎土であるが、その素焼き面は酸化して赤褐色を呈している。内外器面ともに黒釉をかけてある。高台は削り出しである。尚、両者とも産地は不明である。

54～56は播鉢である。54は琉球産で、明るい褐色を呈し、無釉である。55は薩摩焼に類似するもので、両面とも紫がかった濃い赤褐色を呈している。56は産地不明であるが、日本本土産と思われる。両面とも紫がかった赤褐色を呈し、無釉である。(米倉)

〈石器・貝器〉 (第8図 図版Ⅶ中)

57は砂岩製の携帯用の砥石で、下部を欠失している。4面とも使用したものと思われるが、両側面の使い込みの痕が著しい。他にも1点、付近からの拾得品が知られている。58はⅡ層から

出土したヤコウガイの蓋である。この蓋の薄い部分には打ちかいたような痕がみられ、貝刃として使用したものかと思われるが、風化が著しく断定しかねる。



第8図 石器・貝器実測図
57・58 ; Ⅱ層

他にⅡ層から1点、表採品に1点、これに類似するものがある。(鳥越)

〈自然遺物〉

全部で9科13種の貝が出土している。食滓であろう。すべてがⅡ層からの出土であり、いずれも風化が著しい(出土貝類一覧)。なお牛の肩甲骨を含む獣骨片がⅡ層を中心として数十点出土している。(鳥越)

【出土貝類一覧】

腹足綱	にしきうず科	ベニシリダカ	<i>Tectus conus</i>
	りゅうてん科	チョウセンサザエ	<i>Marmarostoma argyrostomum</i>
		ヤコウガイ	<i>Lunatia marmorata</i>
	そでがい科	スイジガイ	<i>Harpago chiragra</i>
		マガキガイ	<i>Conomurex luchuanus</i>
		クモガイ	<i>Lambis lambis</i>
	たからがい科	不明	
	あくぎがい亜科	不明	
	ことまきぼら科	イトマキボラ	<i>Pleuroploca trapezium</i>
	いもがい科	不明	
斧足綱	しゃこがい科	シラナミ	<i>Tridacna elongata</i>
		ヒメジャコ	<i>Tridacna crocea</i>
	まるすだれがい科	ヌノメガイ	<i>Periglypta puerpera</i>

4. 小 結

メーサフ散布地はⅠ・Ⅱ層ともに攪乱されており、遺物を層位的に把えることができなかったが、ネッツェ散布地ではⅠ層以外で遺物を層位的に把握することができた。

ネッツェ散布地のⅣ層ではⅠ類土器と類須恵器のみが出土した。Ⅰ類土器はフェンサ下層式土器に比定できる。フェンサグスク貝塚^{註1}では、Aトレンチ・Bピットの第Ⅲ層からこの土器と類須恵器が出土し、当散布地と同様の共伴関係を示している。またⅠ類土器には滑石を混入したのが見られるが、南西諸島には滑石の産地がなく、滑石製石鍋の存在と考え合わせ、注目すべきである。

Ⅲ層ではⅣ層のものに加えてⅡ類土器・南宋白磁が出土した。Ⅱ類土器はフェンサ上層式に比定できる。フェンサグスク貝塚第Ⅱ層では、この土器と磁器・類須恵器が出土しており、ここでもフェンサグスク貝塚と同様の共伴関係を示している。

Ⅱ層ではさらに近世陶磁器・貝・獣骨等が出土した。陶磁器では琉球産など近隣産のもの他、明初の青磁・南方系陶磁器・九州本土産の染付などの遠来のものも見られた。碗・鉢・徳利など小形のものは遠来のものを、甕などの大形のものは琉球のものや薩摩焼など、他に比べて近距離で焼かれたものを使用していることが注目される。またこの層から携帯用の砥石が出土したが、他に同様の拾得品もあり、当時の金属器の日常的な使用の傍証となろう。

今回の発掘ではネツツェⅤ層直上でピット等が検出された他は、明確な遺構は検出されなかった。しかし当地は南東方向に傾斜する緩斜面上に立地し、木戸井を中心とする湿地を近くに持つという絶好の立地条件を示しており、両散布地は、生活址を伴う遺跡の縁辺にあたるものと思われる。メーサフ散布地はその南西に隣接する高みに生活址の存在が推定される。またネツツェ散布地のⅢ層・Ⅳ層の出土遺物はすべて小片で、層が流入土であることを考えあわせると、生活址の中心はその北側にあるものと思われる。ネツツェⅡ層は比較的安定した層で、陶磁器の破片も大きく、貝・獣骨の散布も見られたことから考えると、この時期の生活址は特に近接した位置にあるものと思われる。

いずれにしても今回の朝戸地区の発掘は、与論島におけるグスク時代初期～近世にかけての生活の連続と、南洋から九州にわたる地域との活発な交渉を跡づけ、今後の調査に関する具体的な見通しを提供したと言えよう。(米倉)

註1. 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要社会篇』13(1969)

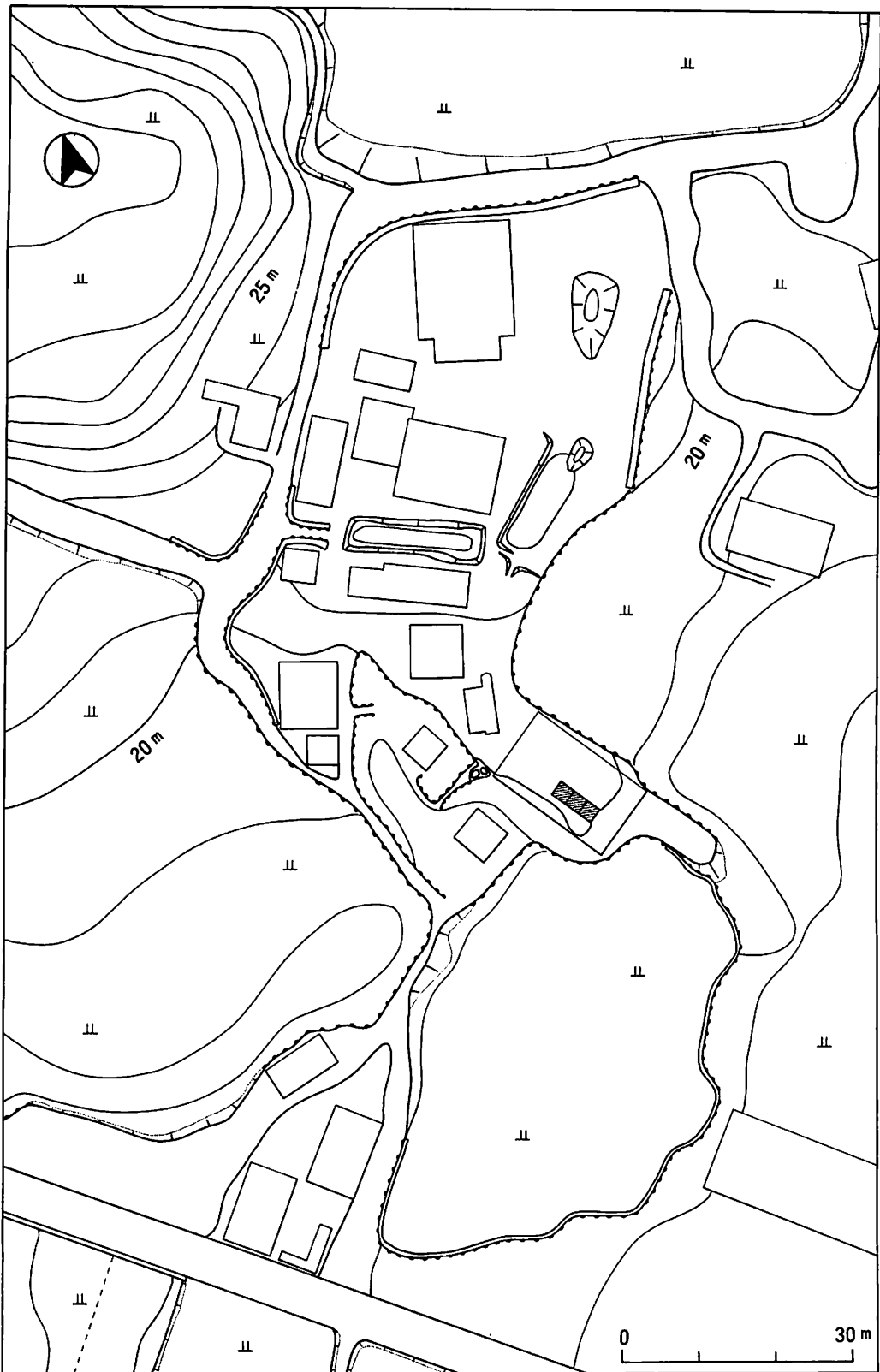
II ヤドゥンジョウ遺物散布地

1. 位置と環境(第9図 図版Ⅷ)

ヤドゥンジョウ遺物散布地は与論島の東南隅の赤崎海岸に近く、与論町麦屋693の2、与論民具館内にある。朝戸地区から赤崎に向って数段の隆起珊瑚礁の海岸段丘が形成されている。民具館は北西から南東方向に舌状に伸びる低い段丘の突端を占めている。付近は民具館建設及び畑地化によりほぼ削平されているが、遺物の散布地点はかろうじて旧地形をとどめている。海岸まで約400mの距離で、海拔20mの等高線が付近を通っている。

民具館の周囲は隆起珊瑚礁を利用した石垣をめぐらしてある。東側及び西側の石垣の外側は1～1.5mの段差をなして低くなっている。民具館西側の石垣付近、発掘地点の北20m付近、館の北東100m付近に湧水する地点がある。

最初に遺物の散布に気づかれたのは民具館経営の菊千代氏である。展示施設を新設中、その床下に当たる部分から発見されたため、床を張らずに建物で覆って出土地点そのものを保護された。現在出土地点は民具館資料のひとつとして一般観覧者の見



第9図 ヤドゥンジョウ遺物散布地地形測量図

学コースに組み込まれている。

付近の状況としては、館の100m東方、通称 Nōshiku で石器・琉球産の甕の破片・無文の土器片が採集され、館の北東200mのこんもりとした森は採所となっており、そこで石斧が発見されている。また、館の北西200m、片岡光政氏の畑地では宇宿上層式類似の土器散布が報告されている。

赤崎付近は「アマンジョウの井戸」をはじめ湧水が多く、海岸には堡礁が発達して百合ヶ浜の浅瀬へと続いており、先史人の漁場として大きな意義を持っていたと推定される。これらの条件は、この付近に比較的優勢な未発見の遺跡が存在することを予察させる。

発掘地点は民具館が占地する舌状地形の南東部の突端に近く、珊瑚礁の露頭が重なってその周囲より1mほど高くなっている。この付近が開発された際、微高地でしかも珊瑚礁が盤踞しているために削平をまぬがれたものと思われる。

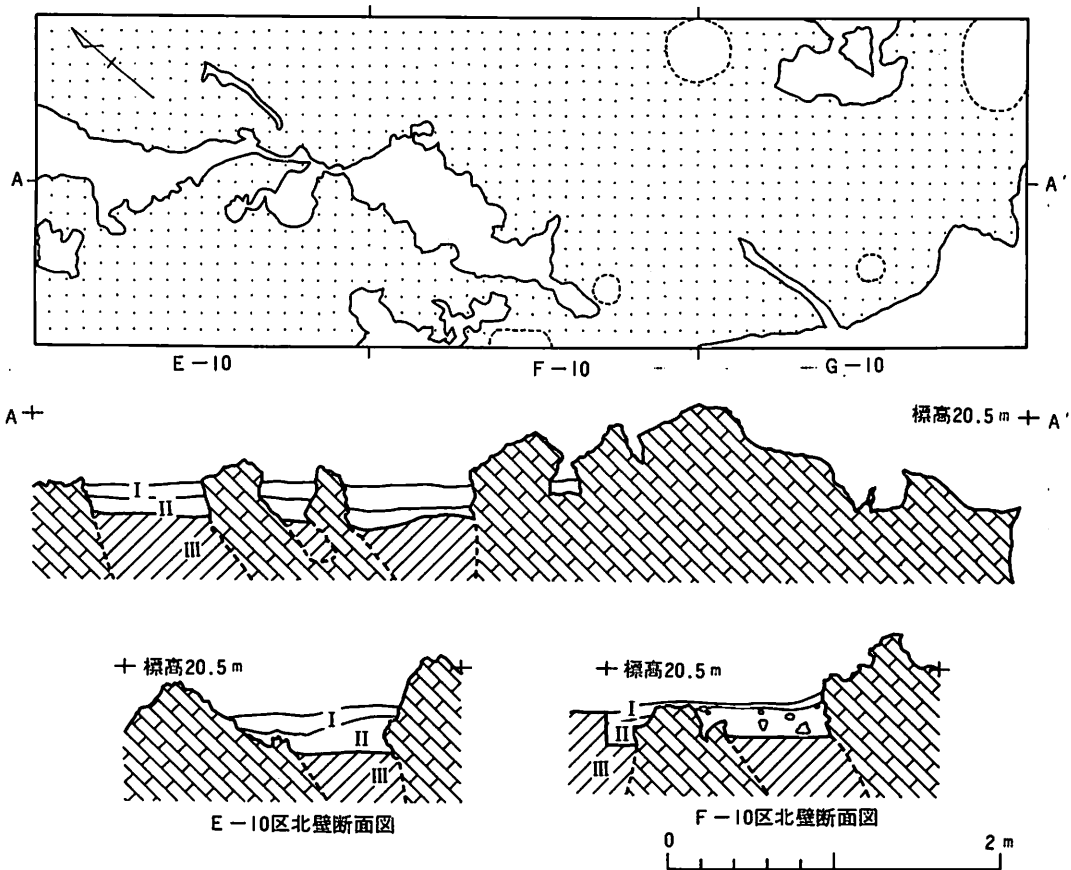
トレンチは調査地点を覆っている民具館の建物に平行に、北西～南東に長く、2m×6mを設定した。屋内のことであり、作業に難点と利点とあったが、珊瑚礁の露頭にはひどく悩まされた。 (松尾)

2. 層序 (第10図 図版IX下)

隆起珊瑚礁の露頭の隙間に3層の土層が確認された。I層・II層はともに攪乱層であり、III層は地山である。

I層 厚さ5～10cmの暗赤褐色を呈する表土層である。屋敷地を造成する際に持ち込まれたと推定される白砂が混入している。従って攪乱層である。土器の小片が数点検出された。

II層 厚さ10～20cmの暗赤褐色を呈する土層である。粒子が細かく粘性が強いが、乾燥すると著しく硬くなる。隆起珊瑚礁に接する部分の土はIII層に類似した赤褐色を呈しているが、これは珊瑚礁の風化に影響されたためと思われる。なお、発掘区から北東に1mの地点で、以前このII層に相当する層から焼土が検出されている。発掘区を離れると未攪乱の部分があるもののようである。この層からは土器片・石器・貝刃器が数点検出されている。土器片は5種のものが無秩序に出土する。攪乱層である。



第10図 平面・断面実測図

Ⅲ層 赤褐色を呈する無遺物層で、地山である。

(河野)

3. 出土遺物

〈土器〉 (第11図 図版X下)

従来の採集品と調査による出土土器をあわせると158点であり、いずれも細片である。器形、文様などの相異から5種に分類できる。いずれも風化が著しく、胎土に石英、コーラル、雲母片などの混和材を含むが、Ⅴ類のみは雲母片を含まない。

I類(1・2) 1は口縁部の破片であるが、僅かに肥厚し、外反する。肥厚部と肥厚部直下に横方向の沈線を持つ。2は鋭利な施文具で斜方向に沈線を施した胴部片である。1・2ともに赤褐色である。

Ⅱ類（3～8） 胴部の張った壺形土器で、頸部から胴部上半にかけて文様を持つ。5・6は胴部上半に細い凸帯を貼付し、それをはさむ形で叉状の施文具による刺突連点文を施したもので、凸帯より上部に縦方向の沈線を持つ。8は凸帯の一部を残すものである。3・4は凸帯のある位置に横方向の沈線を施し、7は2列の刺突連点文のみを施してある。色調は暗褐色～褐色で、内外器面ともにナデによる調整が施されている。

Ⅲ類（9～11） 肥厚した山形口縁を持つ甕形土器である。9は赤褐色で篋によるナデの跡がみられる。10は明赤褐色で、口縁断面が長方形を呈する。11は比較的硬い明褐色の土器で、外器面に縦方向の2本の沈線を持つ。

Ⅳ類（12～20） 胴部が張り出した無文の壺形土器である。口縁部断面は肥厚し、蒲鋸形もしくは三角形を呈する。色調は赤褐色で、胎土は混和材を含まないきめの細かい砂質のものもある（14・15）。内外器面ともにナデ調整が施されている。

Ⅴ類（22～24） 焼成は良好で、入念な器面調整が施されており、中には滑沢をもつものもある。色調は赤褐色、胎土は密で混和材は少量しか含まれていない。内器面は横方向に、外器面は縦方向でやや粗めに、觔状の工具による調整痕が残っている。

底部は21のみである。赤褐色のやや尖った丸底で、Ⅲ類またはⅣ類に伴うと思われる。

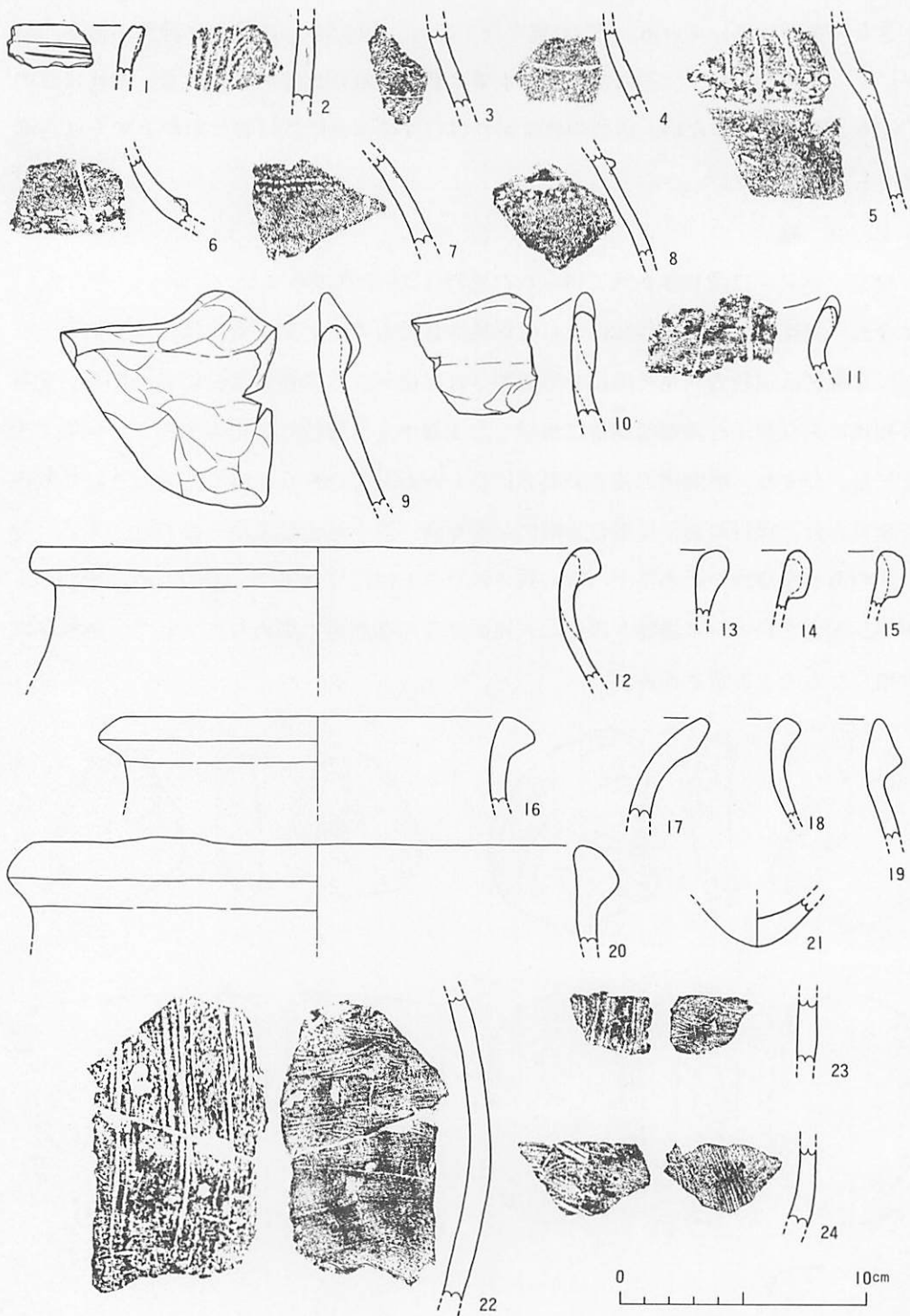
Ⅰ類は沈線文土器で隅原遺跡に類例がみられる。河口貞徳氏の編年では、Ⅱ類は喜念Ⅰ式土器に、Ⅲ類は宇宿上層bタイプに、Ⅳ類は宇宿上層aタイプに相当する。Ⅴ類は上記の4類よりも時期の降るものと思われる。（河野）

〈貝器〉（第12図 図版Ⅶ上）

ヤドウンジョウ遺物散布地で、加工痕のあると思われる夜光貝の蓋3点を得た。うち1点はⅡ層から出土し、残り2点は民具館の展示の一部として発掘区周辺に並べられていたものである。3点とも夜光貝の蓋の薄い部分を凸面より凹面に向かって大きく打ち欠いて刃部らしきものを作り出している。風化が激しく細かい調整や使用痕は認めることができないが、貝刃器として用いられた可能性がある。

〈石器〉（第12図 図版Ⅶ上）

民具館の展示品の石の中に、石器として使用された可能性のあるものが数点見られた。うち27は長さ8.1cm、幅5.6cm。扁平な緑色片岩の両面に打撃を与えて刃部ら



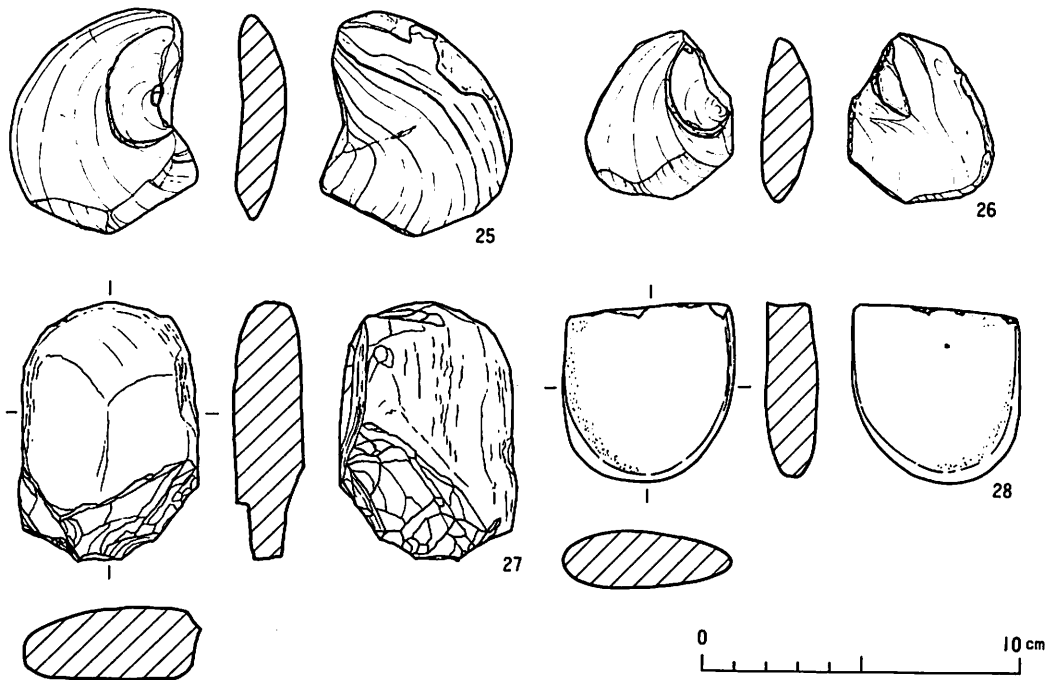
第II图 土器实测图

1 · 3 · 9 · 24 ; F-10区II層, 2 ; G-10区I層, 10 · 17 ; G-10区II層, 4 ~ 8 · 11
 ~16 · 18 ~23 ; 表採

しきものを作り出している。28は現存長5.5cm、幅5.4cmの黒色片岩製である。扁平で丸い自然石を割り、その割れ口を水平に磨って用いた跡が見られる。割れ口が中くぼみになっているため、研磨の痕は割れ口の周縁部分に特に著しいが、中くぼみ部分にも及んでいる。(宮本)

4. 小 結

ヤドウンジョウ遺物散布地で得られた資料は200余点であった。しかし、その多くは今回の発掘以前に菊千代氏によって採集されたもので、発掘資料は僅少である。また、発掘区は遺物の発見当時に一部掘鑿されており、その他の部分においても、遺物は複雑に入り組んだ隆起珊瑚礁に堆積した土層中より層位的に把握できない状態で出土した。つまり、珊瑚礁の任意の高さにひっかかっていたり、滑り落ちたりした状況で発見され、埋没の様子に層位分離に必要な斉一性を見出し難かったわけである。発掘区のある微高地が周囲削平の際に残されたことはほぼ確実で、そのため、周囲の土が掘り起こされる毎に遺物が次第に人為的にこの微高地に集められてきて、無秩序に堆積したものと推定される。



第12図 貝器・石器実測図

25・27；F-10区II層， 26・28；表採

今回の発掘では、上述のような状況で何ら遺構を把握することができなかった。しかし、このあたりが南に伸びた舌状の小高い地形であり、しかも湧水に恵まれており、かつてトレンチ北東側に焼土が認められたことなどをあわせて考えると、発掘区に近接して良好な居住地があった可能性が極めて強い。

出土した土器の型式によれば、これらの居住はほぼ3つの時期にわたって展開されたものであろう。即ちⅠ類沈線文土器を伴う時期、Ⅱ類のいわゆる喜念Ⅰ式土器とⅢ・Ⅳ類宇宿上層式土器を伴う時期、Ⅴ類擦痕文土器を伴う時期の3期である。今回検出された喜念Ⅰ式土器と宇宿上層式土器はその胎土によっては区別をつけ難いものも存在し、極めて近接する時期に作られた可能性がある。沈線文土器はこの二型式にやや先行するものと考えられるが、その時間的距離はさほど大きくはない。一方、沖縄型と思われる擦痕文土器はこの二つの時期よりかなり時代が下降し、永い時間の断絶が認められる。これは先史時代の南島一般に見られる、時代における居住地の立地条件の変化を反映しているものと思われる。つまり、台地や丘陵上の平坦部に営まれていた居住地が、この断絶を埋める土器型式を伴出する他の多くの遺跡のように、海岸の砂丘地へ移動したものであろうと考えられる余地がある。また、この断絶を境として、古くは奄美型の土器が、新しくは沖縄型の土器が主流となる傾向もあわせて窺うことができよう。(宮本)

三 ま と め

今回の調査は与論島における最初の考古学的発掘調査であった。遺構を検出することはできなかったが、本島における先史の人文のおおよそその変化を辿ることができた。

現在のところ、与論島における最古の人文の証左はヤドゥンジョウにおける第Ⅰ類の土器、即ち沈線文土器である。この土器は沖縄本島中部の隅原遺跡出土のものと同類であり、沖縄先史時代前期末に当るものと考えられる。

南西諸島全体における最も古い土器は、九州方面でも最も古い土器群に属する爪形文系の土器である。それに続いて曾畑系の土器の南下が見られる。従って南西諸島全体の人文は九州の文化の南下によって縄文時代早期にはじまって前期に及んだことになる。しかし中期に相当する時代が欠落している。この空隙の長短と、それが生じた理由は今のところ不明である。

南西諸島に再び、しかも急激に遺跡が形成されるのは沖繩先史時代前期、即ち縄文時代後期である。出土する土器は、すでに南西諸島の土器として独立した型式のもので、稀に九州から移入された土器として市来式の土器を伴っている。つまり、九州から独立した南西諸島の独自の文化は縄文後期に相当する時期に開始されたことになる。前述の第Ⅰ類土器（沈線文土器）の存在は大島・徳之島・沖繩本島などの主要な島々で人文が再開されると間もなく、この与論島でも人々の生活が開始されたことの証拠である。その時期は、現在からおおよそ3000年ほどさかのぼった時期と推定される。

与論島は奄美と沖繩の接点にある。南西諸島中部圏の先史文化は奄美と沖繩ではその細部に相異がある。先史の与論島がどちらに属したか若干の興味をそそる。ヤドゥンジョウの第Ⅰ類土器は沖繩型であり、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類土器は奄美に発生した土器型式に属し、Ⅴ類擦痕文土器は沖繩型である可能性が高い。ネッツェⅠ類・Ⅱ類土器は沖繩型の土器であり、製作された時代はヤドゥンジョウⅡ・Ⅲ・Ⅳ類土器とⅤ類土器の間に位置する。南西諸島中部圏全体の推移では、はじめ沖繩と奄美の両方の土器の型式は、共通の要素を持ちながらもそれぞれ独自の型式を維持しているのが、沖繩先史時代中期に至って徐々に奄美の諸型式が南下し、後期を経て晩期即ちグスク時代に入ると沖繩の諸型式が激しく北上して奄美を席卷する様相を示す。従って、与論島における土器型式の推移は、全体としてこの傾向に従いながらも若干の不整な出入を示していることになる。これは与論島が両地域の接点に位置しているため、主潮の動きとは別に、その時々微妙な情勢の変化にまで生活ぐるみで反応したことを示している。先史時代の与論島は、小島ながら交流の中心点としての歴史的な役割をかなり積極的に果たし続けたものと臆測される。

与論島における先史の人文の展開は、その地理的に勝れた位置に依るだけではない。この島は比較的接近しやすい海岸線を持ち、広い礁原に囲まれ、あまり峻しくはない高地とその四囲の豊かな湧水に恵まれている。漁撈と採集については充分な利点を持つ地形である。ただ、狩猟の便宜について若干の懸念がある。若し、大形哺乳類の棲息がなかったとすれば、この島の人口の抱擁量はいちじるしい制限を受けることになる。その意味で、後掲の盛山氏の採集された猪牙の出自を何らかの方法でつきつめたものである。

狩猟・漁撈の時代に続いて、農耕がいつどのような形で開始されたか、南西諸島史については実に重要な問題である。その始原については根栽系の農耕や焼畑の粟作を予想する意見、米作の北上説や逆の南下説等様々である。しかし、どの説もまだ完全な証査を獲得できないままである。ただ、沖縄先史時代晩期が農耕を中心とする社会であったことは、疑問の余地がなく、与論島ではネツツェⅠ類・Ⅱ類の土器の時代がこれに相当する。

ネツツェⅠ類土器は沖縄のフェンサ下層式に、Ⅱ類土器はフェンサ上層式に相当する。フェンサグスクは小さな崖に囲まれた舌状の台地の突端部に遺跡が形成されている。下層式に類須恵器が伴い、上層式にはそれに加えて青磁と鉄製品が伴出した。この他にもフェンサ式土器を出す遺跡は多く、その特色をまとめると、「崖地において、類須恵器・青磁等の施釉陶・鉄製品を伴い、布目の圧痕・コメの圧痕を持つ土器や炭化米・炭化大麦を出土することがあり、多くの場合牛馬の骨が発見される」ということになる。つまり、この時代は農耕・動物飼育を行なう時代で、好んで防禦的地形に居住し、遠く中国・南シナ方面と交渉を持った時代である、ということになる。ネツツェ土器散布地の上方崖上にその存在が推定される当時の集落は、出土品からみても占地条件からみても、他の沖縄の同時代の集落と同性質のものである。今回の調査結果は、その時代の開始と類須恵器が深いかわりを持つものであるらしいこと、その時代の開始は、多分、12世紀をさかのぼるものであること、などを示唆している。与論島の城遺跡は長大な城壁を持つ沖縄式城郭の最北端として有名であるが、沖縄先史時代晩期に至って沖縄系の文化が奄美を圧するに至った時、ネツツェの人々と同じように崖上集落の建設に従っていた城付近の人々は沖縄系の勢力の最北端の拠点として奄美統御に尽力し、首里王朝を中心とする国家の建設に積極的に貢献するに至ったものと推定される。以上、発掘によって検証された事実の他に心証や見通しに属することを併せて述べた。

(山口)

付記 採集遺物

以下に今回の発掘調査以前に採集されていた資料を付記しておく。なお文中の番号は掲図中の番号である。

I (第13図 図版Ⅱ下・Ⅶ下)

下記の3(類須恵器)以下の資料は盛山新一郎氏が朝戸地区で採集し、保管されていたものである。4の凹石は、西側の台地上のメーサフ遺物散布地付近、5・6・7(猪牙・牛歯)は、ネッツェ遺物散布地より北約50mの盛山氏宅入口わきの空地で採集されたが、その他については採集地点を失念されたとのことである。

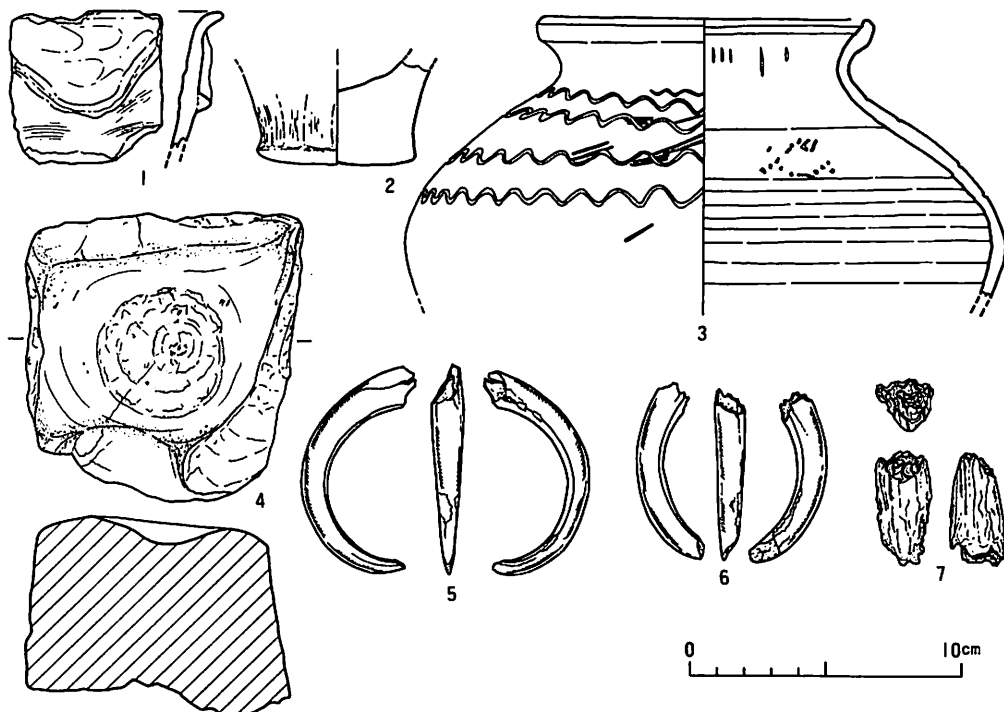
1はやや外反する土器の口縁部の破片である。胎土に石英・コーラルを含む。口縁下に波状になると思われる貼付け凸帯を有し、横方向のナデを施す。色調は明赤褐色を呈する。2は平底の底部片である。胎土は石英・コーラルを含む。ヘラ削りの後ナデを施し、色調は赤褐色を呈する。

4は自然石を利用した凹石で、一部に欠損がある。表面に深い円形の凹がある。通常^{註1}の凹石とやや異なり、類品が伊波貝塚にある。この他に、磨石・敲石の役割を兼ね備えたと思われる石器がある(図版Ⅱ・下)。全面研磨のもので、中心部はより入念に研磨してある。また中心部には敲打痕もみられる。

5・6は猪の牙である。対をなすようである。突端の磨耗が少なく、比較的若い個体であろう。また各稜が鋭さを欠いているが、研磨した痕も認め難く、その原因は不明である。7は牛の上顎の臼歯である。

3は類須恵器片である。城部落の鐘乳洞が老人会の努力で整備され、7月20日に完工式が挙行されて極楽洞と命名された。洞の奥に、天井が落ちて地上と通じた部分があり、その穴から投げ込まれたものの中に混っていたという。肩の張りが強い壺形土器の口縁から胴部に相当する。胎土に砂粒が多く、表面は粗い。外器面には叩きの後一本書きの波状文を描いている。内器面にはロクロ痕がそのまま放置され胴部上面に霰文状の叩きが見られる。色調は外器面は黄灰色、内器面は青灰色である。外器面には、洞の石灰分が付着している。

註1. 大山柏『琉球伊波貝塚発掘報告』(1922)



第13図 採集遺物 I

II (第14・15図 図版 XI)

第14・15図及び図版に掲げたものの多くは、嘗て『南日本文化』^{註1}No.7に発表されたものである。しかし、町の文化財調査報告書の第一号に載せておけば今後の便宜が大きいと考え、新資料と合わせて採録することにした。

1は質の緻密な形のよい転石を石杵に使用したものの。図の下方は折損しているが、折損面を引き続いて使用したため、中凹みになっている。4・5も自然石の端を敲打に使用した例である。

石斧は3・7の2点。いずれも小型で、充分使用された後に遺棄されたものようである。3は緊縛用の捲り込みが顕著である。

凹み石が最も多く、3種に分けられるようである。4・6・9・10・11は小形の転石を使用したものである。必要に応じて好みの形に整形することもあったらしく、6に研磨された部分が、9に敲打による調整痕が見られる。なお、4は両端に石杵風の挫傷がみられる。8・15はやや大形で、短い立方形で、6面ともに作業に当てられている。凹みが大きくて深いこともこの手の通有の特色である。13・14は据えて使用

することが明らかなものである。

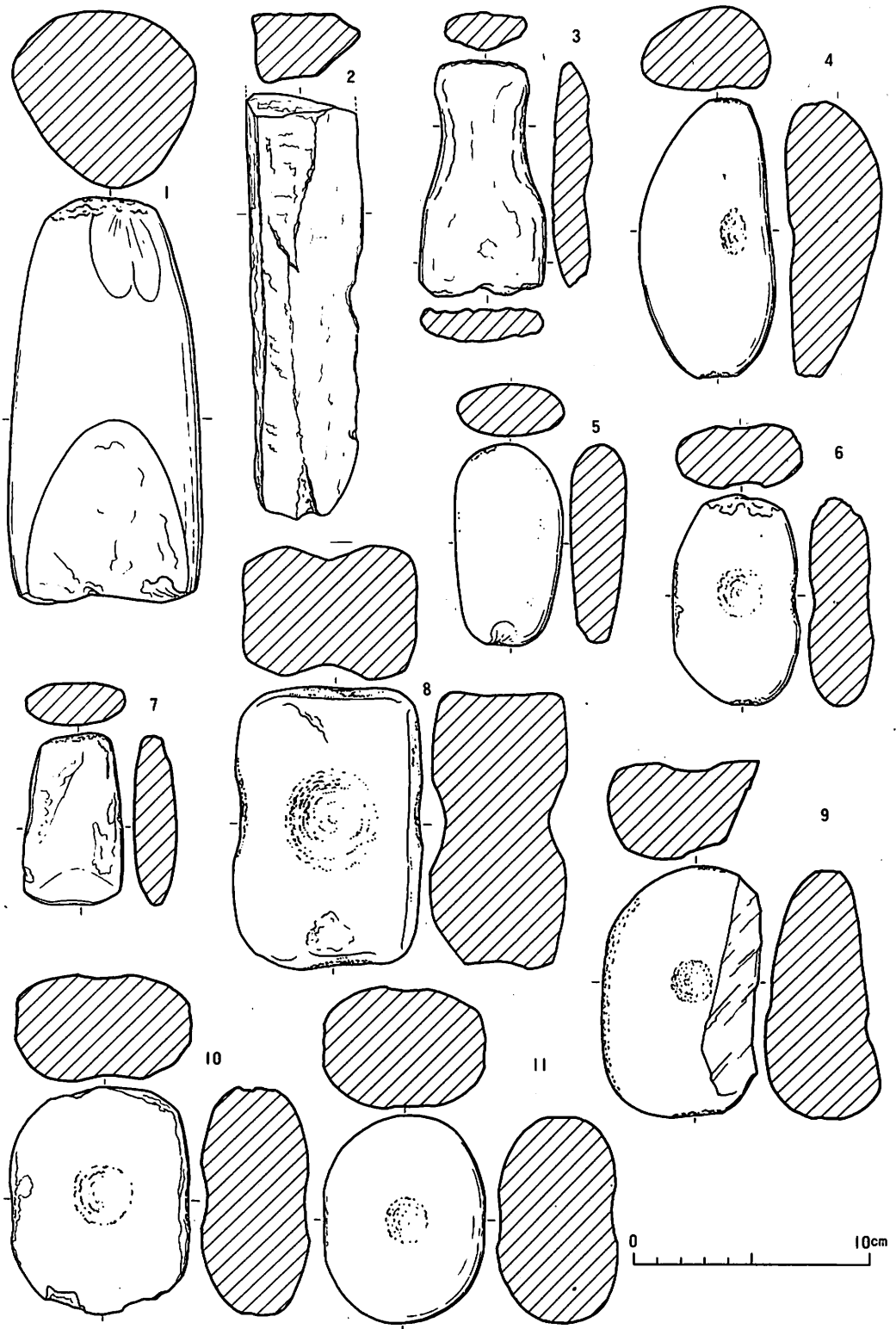
12は奄美・吐噶喇の遺跡から出土するもので、植物性食糧の轆碎用の道具と思われる。^{註2} 本例の場合、自然礫を部分的に叩彫して成形してある。なお、中央に造り出された稜の両側だけ研磨してある。

2は人工によるものかどうか判定困難であるが、一応掲げた。各資料の発見者採集地等、下に掲げておく。 (鳥越)

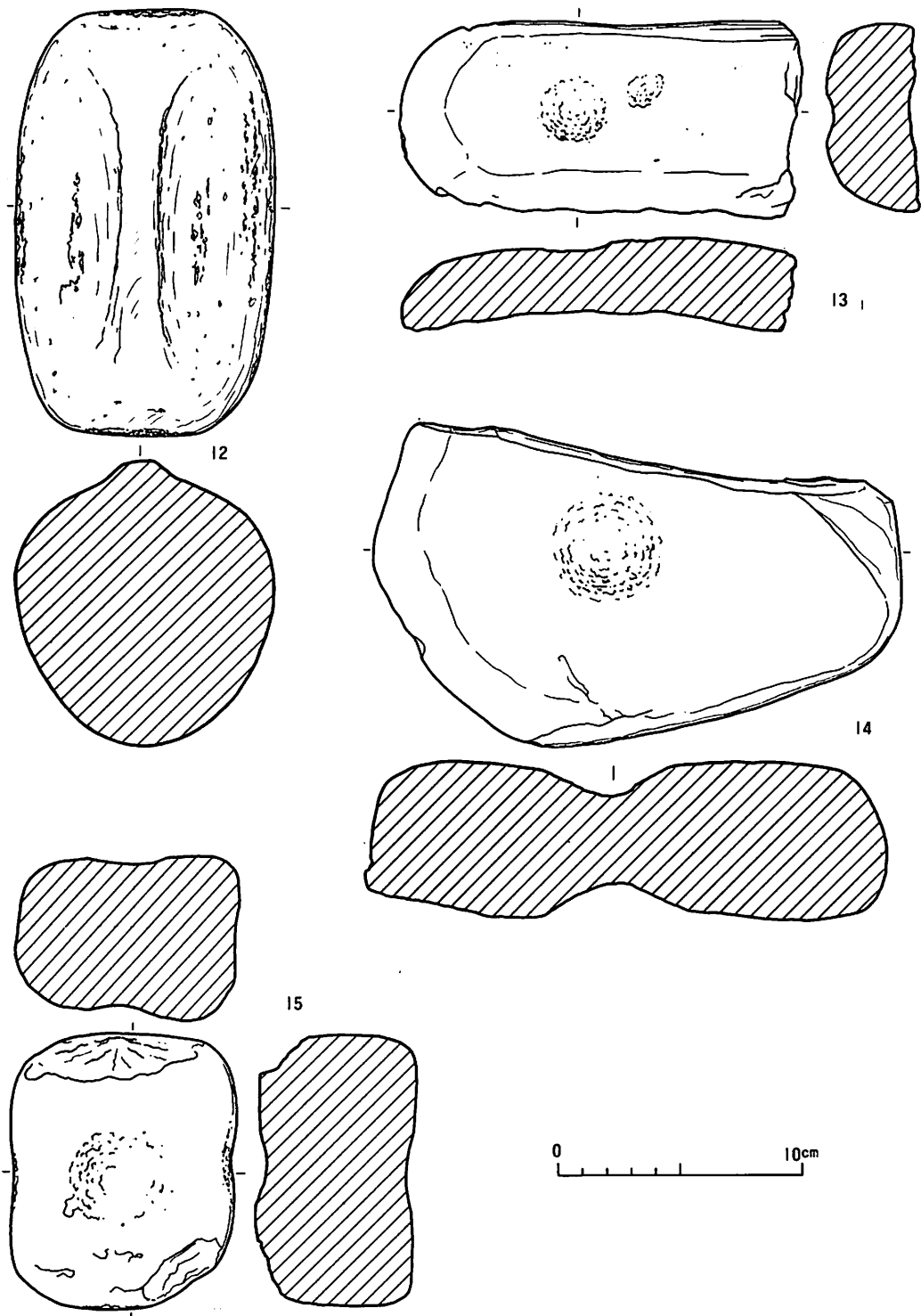
註1. 白木原和美「与論島における先史学的所見」『南日本文化』No.7 鹿児島短期大学南日本文化研究所(1974)

註2. 白木原和美「クガニイシ」『法文論叢』No.41 熊本大学法文学会(1979)

第14・15図の番号	図版 XI の番号	発見・所蔵者	発見地等
No. 1	No. 5	市来加平氏	ネッツェ
No. 2	No. 4	岩山新二氏	岩山氏邸
No. 3	No. 2	市来加平氏	ネッツェ
No. 4	No.11	市来加平氏	ネッツェ
No. 5	No. 8	岩山新二氏	シーシチャゴー付近
No. 6	No.12	岩山新二氏	シーシチャゴー付近
No. 7	No. 3	市来加平氏	ネッツェ
No. 8	No.13	岩山新二氏	シーシチャゴー付近
No. 9	No.10	市来加平氏	ネッツェ
No.10	No. 6	菊 千代氏	岩山仙栄氏母堂採集
No.11	No. 7	市来加平氏	ネッツェ
No.12	No. 1	菊 千代氏	ノーシク
No.13	No. 9	市来加平氏	ネッツェ
No.14	No.15	菊 千代氏	ノーシク
No.15	No.14	菊 千代氏	岩山仙栄氏母堂採集



第14图 采集遗物II-1



第15図 採集遺物II-2